

令和6年度第1回学術講演会（講演抄録）

## 「国道16号線と群馬県がつくった日本の歴史」

### The Japanese History Made by Route 16 and Gunma Prefecture

講師 柳 瀬 博 一

（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）



国道16号線は、東京の中心部から30キロ外側、東京湾をふちどるようにぐりと回る、実延長約326キロの環状道路だ。

三浦半島に位置する神奈川県横須賀市走水から、神奈川、東京、埼玉、千葉の四都県24の市と町を抜け、房総半島の富津まで、東京から名古屋までとほぼ同距離を繋いでいる。

開通したのは高度成長期を迎えた1963年。国道16号線は戦後日本の「郊外」を創り上げた道路である。

1950年代から60年代にかけて、工業地帯が発達し、サラリーマン社会が巨大化した首都圏において、新興住宅地と目されたのが16号線沿いだ。首都圏の巨大ニュータウン13のうち6つが16号線の通る地域＝16号線エリアにある。16号線の通る24市町自治体の人口総計は2018年時点で1185万人。東京23区984万人（2024年）を上回る規模だ。

2000年代以降、日本全国で進んだモータリゼーションも、16号線エリアが発祥と言える。イオンは千葉・幕張に本社を置き、自動車来店する客を前提としたモール開発を16号線沿いで積極的に行った。三井不動産は2000年代、「ららぽーと」と「三井アウトレッ

トモール」を積極展開したが、首都圏のアウトレットモール5店全てが16号線エリアにある。

ただし、戦後発達した16号線エリアは、「歴史や文化がない」イメージが強い。実際、幹線道路に画一的なショッピングモールやチェーンレストランが並び、自動車ばかりが目立ち、駅前には衰退している。

対比されるのは東京都心だ。1590年、徳川家康が江戸城に入城し、1603年江戸幕府が成立以来、関東の中心であり、明治維新で天皇が京都から東京に居を移して以来、日本の中心でもある。日本の政治・経済・教育・文化の中心が東京都心であることは間違いない。

かくして首都圏においては、東京都心が歴史的にも経済的にも政治的にも文化的にも最上位にあり、郊外に行くほどヒエラルキーが下がる。都心から30～50キロ郊外を走る国道16号線エリアは、「都心より下」というわけである。

しかし、16号線エリアや北関東の群馬県が、東京都心に比べ「歴史がなく、文化レベルも低い」というのは、事実として間違っている。

江戸時代以前の16号線エリアの歴史、さらには明治維新以降現代に至る16号線エリアと群馬県との歴史を眺めれば、このエリアがあつてこそその日本の繁栄だったことが明白である。

そもそも日本で最初に見つかった旧石器時代の遺跡は、群馬県の岩宿遺跡である。その南にある16号線エリアにも旧石器時代、縄文・弥生時代、古墳時代の遺跡や古墳が多数発見されている。また、埼玉は古墳時代の関東の重要地域だったことはよく知られている。

江戸時代を経て幕末から明治維新にかけては、16号線エリアの生糸・絹産業が日本の近代を支え、外貨の大半を稼ぐようになった。16号線の通る台地とリアス式海岸は、航空基地と軍港・貿易港となり、富国強兵と殖産興業を体現する場となった。

そして、明治時代からの日本の生糸産業の要となったのが、群馬県である。群馬県と横浜を結ぶ「道」が、日本の近代を創ったといっても過言ではない。

元々、群馬は日本で最も古い生糸産業の盛んな地域の1つである。品種改良されたカイコガを養殖して生糸を得る「養蚕」は5000年ほど前に中国で始まったとされる。日本には弥生時代から古墳時代にかけて養蚕技術がもたらされたが、群馬エリアは古くからの産地として名を馳せていた。正倉院には、8世紀に群馬県新田郡産の絹が寄進されている。さらに桐生や伊勢崎では絹織物業が発達した。

江戸時代末期の1859年、事実上の鎖国体制が終わりを遂げ、海外との貿易が復活する。そこで目玉となったのが日本の生糸だった。

世界最大の生糸産出国である清では1840年にアヘン戦争、1851年に太平天国の乱があり、国内の混乱で生糸の輸出がストップしていた。日本の生糸は、一気に最大の外貨獲得商品となったのである。イタリアやフランスなどヨーロッパの生糸生産国では、カイ

コノ病気が蔓延し、養蚕が壊滅状態になったこともあり、日本の生糸はますます重宝されるようになった。

江戸末期から昭和に至るまで、生糸輸出の中心となったのが、16号線沿いにあたる横浜港である。八王子に集められた生糸は、現在の16号線を辿って横浜から世界へ輸出された。

明治維新以降、国道16号線エリア＝横浜と群馬とが生糸で繋がる。1872年、お雇い外国人の力を借りながら近代的な製糸技術を導入した富岡製糸場が、渋沢栄一らの奔走で、群馬県富岡に誕生する。

横浜で生糸ビジネスを展開し、現在の横浜を創り上げた「横浜商人」もまた、群馬出身者だった。高崎市出身の茂木惣兵衛は、幕末に横浜に移り、生糸商人として名をなす。明治時代に入ると、金融業でも頭角を表し、横浜為替会社の設立に始まり、第二国立銀行、第七十四国立銀行の経営に参画する。その後の横浜銀行に連なる銀行だ。群馬県には今も3つの横浜銀行の支店がある。横浜と群馬のつながりの深さが窺える。

さらに、明治期に発達した鉄道の多くが、当初、生糸輸送を目的の一つとしていた。日本屈指の製糸工場である富岡製糸場にほど近い群馬県高崎から埼玉県大宮を抜けて赤羽から上野を繋ぐ現在の高崎線は、生糸輸送が重要な役割だった。高崎線と現在の山手線がつながることで、横浜までの鉄道輸送ルートが確立したわけである。

関東の生糸集積地だった八王子と横浜を結ぶ横浜線（現JR横浜線）も1908年に開通。16号線と並行して走るこの鉄道もまた生糸を運ぶ鉄道だった。さらに、八王子と日本屈指の製糸工場である富岡製糸場にほど近い群馬県高崎を結んだのが1934年開通の八高線である。

群馬の富岡製糸場と横浜港を結ぶ。これが近代日本の鉄道の、極めて重要な役割だった、というわけである。

第二次世界大戦後も、群馬と16号線エリア＝横浜・横須賀の関係は続く。

横浜・横須賀には、米軍・進駐軍が進駐して、米国文化がなだれ込み、芸能や音楽、ファッション、家具、自動車、外食などが広がった。そんな中、横須賀から1つのファッションが生まれる。「スカジャン」だ。

スカジャンの正式名称は、ヨコスカ・ジャンパー。その誕生には、横須賀の米軍基地に集う米兵たちと、群馬県桐生の刺繍業が関わっている。日本に駐留していた米兵たちは、日本のお土産＝スーベニアを求めている。そんな中、桐生の刺繍技術を用いて背中に派手な刺繍を施したジャンパーが、横須賀の米兵たちにとって人気商品となった。それがスカジャンである。一時は、30軒近くの刺繍屋がスカジャンの生産に関わっていたという。

戦後、アメリカ文化がいち早く広がった16号線エリアでは、1990年代の国内自動車保有台数の急増と、アメリカからの圧力による大型小売業の出店規制の撤廃に伴い、郊外型の商業施設が次々とオープンした。日本のモータリゼーションは、1990年代半ばから

2000年代に本格化する。

そんな現代のモータリゼーションに、大きく寄与したのが群馬県発祥のサービス業である。

2023年度の日本の小売業ランキングのベスト10には、ヤマダ電機を展開するヤマダ・ホールディングス、バイシア・カインズ・ワークマンを有するバイシア・グループ、ビックカメラの3社がランクインしている。

21世紀、日本の消費社会は、都心を例外として、自動車で買い物に行く自動車社会に変貌したが、先駆けが16号線エリアだ。群馬県は、以上のような16号線から眺めた日本の古代史、近代史、現代史において極めて重要な位置にあるのだ。

令和6年7月5日（金）於 図書館ホール